

## 阪神・淡路大震災の記憶継承に関する

## 震災後世代の意識と態度

～調査報告(基礎編)～

### Survey Report: Awareness and Attitudes Regarding the Heritage of Memories Related to the 1995 Southern Hyogo Earthquake Among those Born After the Disaster (Basic Elements)

山中 速人<sup>1</sup>・照本 清峰<sup>2</sup>・奈良 雅美<sup>3</sup>・金 千秋<sup>4</sup>

Hayato Yamanaka, Kiyomine Terumoto, Masami Nara, Chiaki Kim

January 17, 2020, marked the 25th anniversary of the Southern Hyogo Earthquake. In the decades since the disaster, a whole new generation has emerged in the region with no experience or direct knowledge of the great earthquake. And yet it is the young people of this generation who will need to pass on the memories of the great earthquake to future generations. In order to clarify the attitudes and awareness among the post-earthquake generation regarding the heritage of disaster memories, the Kwansei Gakuin University School of Policy Studies and Community Media FMYY, a local community broadcasting company, undertook a joint project to survey young people in the region. The survey was carried out among undergraduate students at three universities in the former disaster region: Kwansei Gakuin University, Kobe University, and Kobe Tokiwa University. There were 445 valid responses. The survey questionnaire covered the following five major areas: (1) sources of information on the Southern Hyogo Earthquake, (2) interest in the disaster, (3) awareness and attitudes regarding the heritage of disaster memories, (4) which memories should be passed on, and (5) effective methods for passing on the memories. Upon compilation of the survey results, the following factors became evident. Close to 70 percent of the respondents said they learned about the Southern Hyogo Earthquake in school and felt that school education was an effective method for passing on the memories of the disaster. Among the memories that respondents felt were the most important to be passed on were those conveying practical information that would be useful for disaster mitigation and responding to future disasters. Interest was high in objective facts and data related to the disaster. In contrast, interest was relatively low in subjective information, such as the emotions, feelings, and painful memories of the victims. In conclusion, our research group has chosen to conceptualize this phenomenon of biased interest in memory heritage among those of the post-earthquake generation as “selective inheritance of disaster memories.”

キーワード：災害記憶、兵庫県南部地震、阪神・淡路大震災、集合的記憶、意識調査

**Key Words** : Disaster Memory, The 1995 Southern Hyogo Earthquake, Collective Memory, Opinion Research

1 2019年度総合政策学部共同研究「阪神・淡路大震災の記憶継承に関する大震災後世代の意識調査」研究代表者、関西学院大学総合政策学部教授

2 同研究分担者、同学部教授

3 同研究分担者、同学部非常勤講師

4 同研究協力者、特定非営利活動法人エフエムわいわい代表理事

## 1. はじめに

2020年1月17日は、阪神・淡路大震災(以下：大震災)の発災後25年に当たる。この間、被災地周辺でも、大震災を経験しない新しい世代が数多く誕生している。発災25年目を迎えて、災害の歴史的事実の収集と記録が重要な社会的課題になりつつある今日、将来の災害とその防災に備えるためにも、大震災の歴史と記憶を次世代に継承していく役割を担うこれら震災後世代が、大震災についての記憶の継承についてどのような態度と意識をもっているかについて明らかにすることは、無視することのできない重要な要素である。このような問題意識に立って、1つの意識調査を実施した。

調査は、被災地周辺の複数の大学に学ぶ大震災後世代の若者を対象に実施された。調査では、5つの大きな項目がたてられ、全体で79の質問が用意された。その項目とは、以下の5つである。

- (1)大震災についての知識や情報を何から知ったか
- (2)大震災についてのどんな事象に関心があるか
- (3)大震災やその記憶継承についての認識や態度
- (4)大震災のどんな記憶を語り継ぐ必要があると思うか
- (5)大震災の経験や記憶を伝えるために、どんな手段が効果的だと思うか

本論では、この5つの項目ごとに、その主な結果と特徴を記述していきたい。

なお、本調査の形式と実施過程についての概要は以下のとおりである。

調査方法は、マークシートを併用した質問紙調査であった。

調査対象は、本学部生と被災地周辺の大学(神

戸大学、神戸常磐大学)の学部生であり、有効回答は445票であった。

調査期間は、2019年7月から10月の4ヵ月である。調査票の回収後、マークシートの読み取りを行い、集計と分析が行われた。

調査実施主体は、関西学院大学総合政策学部共同研究班と阪神・淡路大震災の被災地、神戸市長田のコミュニティ放送局である特定非営利活動法人エフエムわいわい<sup>5</sup>である。この研究プロジェクトは、同総合政策学部から2019年度学部共同研究「阪神・淡路大震災の記憶継承に関する大震災後世代の意識調査」として予算的裏付けを得て実施された。

なお、本論文は、調査結果の深い分析に先立って、まず、調査結果からあきらかになった基本的な知見とおもな特徴をまとめるものである。本調査の質問項目と単純集計結果は、本論文の最後に、別表として一括して収録した。

本調査は、2020年度も継続して行われる予定であり、今回の調査結果も含めた総合的でより精緻な分析は、今後の調査の結果とあわせて、ひきつづき考察されることとなるだろう。

## 2. 調査対象者とその特徴(年齢、性別、出生地、現在の居住地、被災地居住年数、被災者との関係、大震災後の地震経験等)

質問紙の配布と回収に関しては、研究分担者および協力者が担当する大学講義を受講する学生群に対して質問紙を配布し、その場で回答を求め、回答状況を確認後、回収を行ったものである。よって、配布された質問紙のほぼ全数が回収され

5 エフエムわいわいと本共同研究班が共同制作したネット配信番組「阪神・淡路大震災25年特別調査報道番組『震災後世代は、阪神・淡路大震災の記憶をどう継承するのか〜阪神・淡路大震災25年、被災の記憶を未来に伝えるために』」の番組アーカイブには、右記のQRコードによってアクセスすることが可能である。



たが、そのうちごく例外的に途中で回答を意図的に放棄したり、また、全質問項目で選択肢①を選択したりするような無効回答を除外した結果、445票の有効回答が得られ、それらを分析の対象とした。

論文末にある別表(単純集計結果)の質問項目72から79が、回答者の属性に関する項目群である。これらの項目群についての集計結果から、回答者の基本的な特徴として、次のようなことがいえる。

まず、回答者の年齢(項目72)については、19歳(52.1%)と20歳(30.1%)で全体の8割を超えた。つまり、回答者の大半が、大震災の4～5年後に生まれた世代だということになる。

つぎに、回答者の性別(項目73)では、女性(60.4%)、男性(37.3%)その他(1.1%)と、女性が全体の3分の2弱を占めた。これは、今回の調査対象者が属する大学学部における性別比の傾向を反映するものであろう。

つぎに、回答者の出生地(項目74)は、大震災の被災地である神戸市、芦屋市、西宮市、宝塚市、伊丹市、尼崎市、明石市、現在の淡路市<sup>6</sup>に生まれた者(26.4%)、被災地以外の兵庫県内で生まれた者(26.5%)、それ以外の地域で生まれた者(46.1%)の3分類でみると、およそ4分の1が被災地で生まれたものであった。

一方、回答者の現在の居住地(項目75)は、被災地居住者(51.2%)、被災地以外の県内居住者(32.8%)、それ以外の地域の居住者(15.5%)の3分類でみると、現在、被災地に居住する回答者は約半数に及んでいる。これは大学進学に際して、被災地以外から被災地に移り住んでいる回答者がおよそ4分の1程度いることを反映していると思われる。

ただ、被災地での4年以上の居住年数を尋ねる質問(項目76)では、4年以上住んだ経験がある回答者(25.8%)は、4年以上住んだ経験がない回答

者(73.5%)の約3分の1であり、この結果をみると、被災地で生まれた回答者のほとんどはそのまま被災地に住み続けており、他方、被災地外から被災地に移り住んだ回答者のほとんどは、大学進学後の比較的短い期間に限って被災地に居住しているものと思われる。

つぎに、回答者の周囲に大震災を経験した人がいるかという質問(項目77)に対して、「家族が被災した」と回答した者が34.6%、「親類が被災した」と回答した者が13.0%、「知人や友人が被災した」と回答した者が5.2%、「いない」と回答した者が44.3%となった。これをみると、全体の半数強の回答者が周囲になんらかの被災者と接する環境にあることを示している。

回答者が被災地の大学で学ぶ学生とというのはものの、その中には、被災地での居住経験もなく、また、被災経験者を直接しらない学生もすくなくないという事実を知っておく必要がある。これは今日の被災地の1つのリアリティであるだろう。

最後に、大震災後に起こった、東日本大震災(2011年)と大阪北部地震(2018年)の2つの地震についての体験を尋ねたところ、東日本大震災の揺れを体験したと答えた者が31.7%、大阪北部地震の揺れを体験した者が77.8%という回答を得た。この結果をみると、8割弱の回答者が、阪神・淡路大震災後の比較的大きな地震について何らかの体験をしていることになる。

### 3. 大震災についての知識や情報の入手経路

調査では、最初に、回答の複数選択が可能な質問として、大震災の知識や情報の入手経路を尋ねた。(A項目1～21)表1は、その結果の要点をまとめたものである。

この表をみると、まず、学校の授業が76.2%、教科書が63.6%と、震災後世代は、もっぱら学校

6 合併以前の旧自治体としては、淡路町、北淡町、一宮町、東浦町、津名町にあたる。

教育をとおして大震災についての知識や情報を得てきたことが分かる。つぎに、第2番目の入手経路として、親やきょうだい、親戚など家族から聞いたという回答が67.0%あった。これに続く第3番目の入手経路は、ノンフィクション映像の54.2%であった。これらの3つの入手経路は、いずれも過半数を示している。

一方、これらに対して、博物館やモニュメント、記念行事などから知ったという回答者は、いずれも低い値にとどまった。また、被災地の大学であるにもかかわらず、被災者の当事者から聞いたと答えた回答者が、半数にみえない44.0%だったことも注目すべき結果であった。一方、家族から知識や情報を得ている回答者が多かったのは、回答者自身の身内に被災経験者がいるという、被災地ならではの特徴といえるだろう。

ただ、それでも学校を通じて知識や情報を得ている回答者が、やはり圧倒的に多いといえる。被災地以外の出身の回答者の中にも、学校教育を通じて大震災について学んだ者はすくなくないと思われる。また、映像をとおして知ったという者や被災者自身から直接聞いたという者の中にも、その機会が学校をとおして提供されている場合が多いと推測することができる。その意味においても、学校教育は、大震災の記憶を継承する上で、これからも重大な要素になることは間違いないと思われる。

災害記憶の継承における学校教育の影響力の大きさについては、本論文の考察の部分で、あらためてとりあげたい。

#### 4. 大震災についての関心の対象

回答者が、大震災のどのような事象について関心を持っているかについて、調査では11の項目を設けて質問した。(B項目22～32)

表2は、大震災のどのような事象について関心があるかについて、その程度を「関心がある」から

表1. あなたは阪神・淡路大震災についての知識や情報を何から得ましたか？(重複回答)

	%
1 被災者	44.0
2 家族	67.0
3 友人	15.3
4 学校授業	76.2
5 教科書	63.6
6 学校行事	30.6
7 ノンフィクション映像	54.2
8 ノンフィクション出版物	21.3
9 フィクション映像	22.2
10 フィクション出版物	7.2
11 SNS等	29.0
12 人防センター	24.9
13 その他博物館	5.6
14 「慰霊と復興のモニュメント」	7.4
15 神戸港メモリアルパーク	16.6
16 北淡震災記念公園	5.8
17 その他記念碑	2.7
18 行政行事	6.7
19 地域行事	4.5
20 宗教行事	1.6
21 その他行事	7.4

「関心がない」までをプラス2からマイナス2までの5段階として計算し、その回答者全体の平均を評価点として、高いものから順に示したものである。

まず、表の最下段に「全体として、阪神・淡路大震災に関心があるかどうか」を尋ねた質問に対する回答の評価点を示した。このプラス1.04という評価得点が、大震災に対する全体としての関心の程度を示すものである。つまり、「どちらかといえば関心がある」程度の関心があることがわかる。この評価点を念頭に置きながら、それぞれの項目をみていきたい。

まず、もっとも関心が高かった事象は、「将来の防災に役立つような教訓や知識」(1.37)であった。これについて、第2に関心が高かった事象は、「震災直後の避難誘導、応急医療、水や食糧の配布などの支援活動」(1.26)、第3に関心が高かった事象は、震災直後の人命救助、消火など救命救急活動」(1.13)についてであった。

表2. 阪神・淡路大震災についての関心の程度

	評価点*	標準偏差
28 将来の防災に役に立つような教訓や知恵など	1.37	0.76
26 震災直後の避難誘導、応急医療、水や食糧の配布などの支援活動	1.26	0.79
25 震災直後の人命救助、消火など救命救急活動	1.13	0.80
27 避難所や仮設住宅での被災者の生活の苦労や工夫など	1.13	0.81
24 個人の住宅や建物の被害状況、再建の過程など	0.88	0.88
32 意思疎通の障害や異文化の背景をもつ「災害弱者」の経験や困難など	0.85	0.95
31 被災地で活動したボランティアや市民団体の活動や経験	0.84	0.98
30 被災者個人の震災に対する見解や震災後の生き方など	0.83	0.95
23 道路、港湾施設、水道・電気・ガスなどのインフラ施設の被災状況、復旧の過程など	0.80	0.94
29 亡くなった人の個人の記録やエピソードなど	0.74	0.95
22 全体として阪神・淡路大震災に関心がある	1.04	0.81

\*5段階尺度の平均 (-2 ↔ +2)

一方、「亡くなった個人の記録やエピソードなど」(0.74)への関心はもっとも低かった。これに継いで、「道路、港湾施設、水道・電気・ガスなどのインフラ施設の被災状況、復旧の過程など」(0.80)についての関心も低かった。「被災者個人の震災に対する見解や震災後の生き方」(0.83)についての関心がこれに続いて低かった。

これらの傾向をまとめると、次のようなことがいえるだろう。

まず、将来の防災に役立つ教訓や知識への関心が高い。しかし、他方、亡くなった人や個人の記録やエピソードに対する関心は相対的に一番低い。このような傾向をみると、大震災について、回答者は、大震災に対して、全体としてみれば関心はあるものの、その関心の程度は、事象や対象に応じて強弱がある。この結果は、最後の考察で議論する「震災記憶の選択的継承」という問題について関係していると思われる。

## 5. 大震災やその記憶継承についての認識や態度

### 5-1 大震災とその復興過程に対する認識

震災後世代である回答者たちは、阪神・淡路大震災とその復興について、どのような認識をしめているのだろうか。調査では、大震災とその復

興について、具体的な意見を刺激文として示し、回答者に対して、それらの刺激文ごとに「共感するか、共感しないか」を5段階で回答をもとめた。

ここでは、それらの中から、特徴的なものを選んで報告する。

まず、「阪神・淡路大震災の被災地は、おおむね復興をとげている。」(D項目43)という刺激文に対して、回答者たちは表3-1のような反応を示した。表によれば、「そう思う」(60.4%)と「すこしそう思う」(30.8%)を合わせると、9割以上の回答者が、被災地がすでに復興しているという認識をもっていることを示した。そのような認識を前提にして、回答者たちは、大震災を過ぎ去った過去の解決済みの問題として捉えているといえるかもしれない。

つぎに、「復興過程で生じた社会問題などを広く伝えることは必要だ」(D項目55)という刺激文に対しては、回答者たちは表3-2のような反応を示した。表によれば、「そう思う」(51.2%)と「すこしそう思う」(38.4%)を合わせると、9割弱の回答者が復興過程で生じた社会問題をオープンに公表することに積極的な認識を示した。社会問題の存在を一つの事実としてオープンに伝えることを肯定的に捉える認識は、震災の記憶継承にポジティ

ブな影響を与えるといえるかもしれない。ただ、回答者たちの多数が、被災地がすでに復興を遂げたと認識していることと合わせて考えると、すでに多くの社会問題が解決されているからそれを冷静に客観視することができるのかもしれない。

被災事実を客観視する傾向は、「大震災の復興が進んでいない町や地域について知らせることは、イメージが暗くなるので強調しない方がよい」(D項目53)という刺激文に対する回答者の反応にも現れているように思われる。表3-3は、この刺激文に対する回答者たちの反応を示したものである。これによれば、暗いイメージの強調に消極的な反応を示した「そう思う」(5.8%)と「すこしそう思う」(11.9%)を合わせても、17.7%に過ぎず、逆に、「そう思わない」(22.0%)「あまり思わない」(31.9%)と暗いイメージであっても、そのままオープンにすることに躊躇しない態度をもつ回答者が、53.9%と過半数を占めた。

他方、震災の痕跡を残すことについては、回答者の認識は分かれた。表3-4は、「災害からの復興を進めるためには、できるかぎり災害の爪痕は消して、新しい町並みや都市景観に作り変えるのがよい」(D項目51)という刺激文に対する回答者の反応を示したものである。「そう思う」(11.2%)と「すこしそう思う」(20.7%)を合わせた、震災の痕跡を消すことに積極的意見が31.9%あるのに対して、「そう思わない」(7.2%)と「あまりそう思わない」(20.4%)を合わせた否定的意見も27.6%存在している。そして、「どちらとも言えない」(40.0%)と態度を保留する回答者が最大多数を占めている。過去の歴史として客観視していたものが、目の前に生々しく姿を現してくることに對しては、戸惑いを示していると言ってよいかもしれない。この質問項目は、別に質問項目として設定した災害遺構の保存の問題についても、関連する項目となっている。

このような戸惑いは、大震災の犠牲者につい

てのリアルなエピソードについての回答者の反応にも、はっきりと認められるものである。表3-5は、「大震災で傷ついたり、亡くなったりした人の悲しい話はできれば聞きたくない」(D項目54)という刺激文に対する回答者の反応を示したものである。これによれば、この刺激文に首肯する回答者は、「そう思う」(8.1%)と「すこしそう思う」(23.1%)を合わせると、全回答者の31.2%を占めた。しかし、逆に、この刺激文に否定的反応を示す回答者も、「そう思わない」(12.6%)と「あまり思わない」(21.8%)を合わせると、全回答者の34.4%を占めた。そして、「どちらとも言えない」と回答した者も33.9%いた。つまり、大震災の犠牲者の生々しいエピソードを知ることに対する回答者の反応は、肯定、否定、態度保留にほぼ3等分され、回答者の戸惑いを反映したものとなった。

表3-1. 阪神・淡路大震災の被災地は、おおむね復興をとげている

	%
1 そう思う	60.4
2 すこしそう思う	30.8
3 どちらとも言えない	6.7
4 あまり思わない	1.3
5 そう思わない	0.2
無回答／無効回答	0.4
全数	100.0

表3-2. 復興過程で生じた社会問題などを広く伝えることは必要だ

	%
1 そう思う	51.2
2 すこしそう思う	38.4
3 どちらとも言えない	7.9
4 あまり思わない	0.7
5 そう思わない	0.4
無回答／無効回答	1.3
全数	100.0

表3-3. 大震災の復興が進んでいない町や地域について知らせることは、イメージが暗くなるので強調しない方がよい

	%
1 そう思う	5.8
2 すこし思う	11.9
3 どちらとも言えない	27.6
4 あまり思わない	31.9
5 そう思わない	22.0
無回答／無効回答	0.7
全数	100.0

表3-4. 災害からの復興を進めるためには、できるかぎり災害の爪痕は消して、新しい町並みや都市景観に作り変えるのがよい

	%
1 そう思う	11.2
2 すこし思う	20.7
3 どちらとも言えない	40.0
4 あまり思わない	20.4
5 そう思わない	7.2
無回答／無効回答	0.4
全数	100.0

表3-5. 大震災で傷ついたり、亡くなったりした人の悲しい話はできれば聞きたくない

	%
1 そう思う	8.1
2 すこし思う	23.1
3 どちらとも言えない	33.9
4 あまり思わない	21.8
5 そう思わない	12.6
無回答／無効回答	0.4
全数	100.0

## 5-2 記憶継承についての態度

さて、それでは、大震災を知らない若い世代は、震災の記憶を継承することについて、どのような態度や意見をもっているのだろうか。調査では、震災記憶の継承について、いくつかの質問群を設定して、回答者の反応を調べた。

まず、大震災の記憶継承について、震災後世代の基本的な姿勢を尋ねる「震災を知らない世代でも、大震災の記憶や経験を将来に伝える責任があ

る」(D項目59)という刺激文にたいしては、表3-6が示すように、「そう思う」(48.8%)と「すこし思う」(37.8%)を合わせて全回答者の9割弱を占める圧倒的多数が、肯定的な反応を示した。もちろん、建前としての姿勢もあるだろうが、大震災の記憶継承を進めようとしている人々にとっては、この震災後世代の態度は、たいへん勇気づけるものといえるだろう。

しかし、どのような記憶を伝えるべきかについての態度は、その対象によってばらつきが認められた。

まず、防災に役立つ知識や経験を優先して伝えるべきだと言う態度が多く回答者にみられた。表3-7は、大震災の記憶継承について、「将来の防災に役立つかどうかを見極めて、役に立つ情報や知識を優先して伝えるべきだ」という刺激文に対する回答者の反応を示している。これによれば、「そう思う」(44.0%)と「すこし思う」(37.5%)を合わせた肯定的反応が全体の8割を超えた。これに対し、否定的な反応を示したものは、「そう思わない」(0.7%)「あまり思わない」(2.2%)を合わせてもわずか3%に満たなかった。

これに対して、犠牲者個人のエピソードを語り継ぐことに対しては、回答者たちの中に戸惑いがみられた。表3-8は、「大震災で亡くなった人の家族や友人を悲しませないために、犠牲者個人の話題は触れない方がよい」(D項目50)という刺激文に対する回答者の反応を示したものである。これによれば、犠牲者個人の話題に触れない方がよいとするものは、「そう思う」(11.9%)と「すこし思う」(24.7%)を合わせて36.6%を占めたが、他方、触れないことに否定的な反応を示した者は、「そう思わない」(4.0%)「あまり思わない」(14.2%)を合わせて18.2%を占めた。また、「どちらとも言えない」と態度を保留した者が44.7%と多数を占めた。

他方、同じ被災者についての記憶でも、表3-9

に示されるように、「大震災の被害から力強く立ち直った被災者や被災地のエピソードをもっと伝えるべきだ」(D項目52)という刺激文に対しては、「そう思う」(25.4%)と「すこしそう思う」(48.1%)を合わせた肯定的反応が7割を超えた。これに対し、「そう思わない」(0.4%)「あまり思わない」(4.9%)を合わせても5%程度と否定的態度を示す回答者は、圧倒的に少なかった。同じ被災者についての記憶でも、明るく積極的なものの継承には前向きであった。

これらの刺激文に対する回答者の反応が示すところを考えると、次のようなことがいえるだろう。大震災の記憶について、自分たちに役立つ知識や教訓について、あるいは、被災者の力強さや復興達成のエピソードには、その記憶継承に積極的な関心を示す一方、被災者個人の辛い感情や苦悩などの否定的な記憶については、触れることに躊躇する傾向が認められたのである。

また、表3-10は、「大震災についての記憶の継承については、被災者の感情や思いの継承にこそ力を入れるべきだ」(D項目47)と「大震災についての記憶の継承については、データに基づく客観的な情報の継承にこそ力を入れるべきだ」(D項目48)という2つの相反する刺激文に対する反応を比較したものである。調査票では二者択一ではなく、それぞれ別の設問として回答者に反応を求めた。すると興味深いことに、回答者の多くは、この2つの刺激文が相反するにもかかわらず、ともによく似た反応を示した。つまり、前者に対しては、「そう思う」と「すこしそう思う」を合わせて59.1%の回答者が同意し、後者に対しても、「そう思う」と「すこしそう思う」を合わせて64.9%が、同意を示した。このことは、回答者が設問をよく理解していないというより、別個に質問をされると、それぞれに肯定的に反応してしまうからだと思われる。

しかし、この2つの回答には、微妙な差異が認められる。それは、記憶の継承に際してデータにもと

表3-6. 震災を知らない世代でも、大震災の記憶や経験を将来に伝える責任がある

	%
1 そう思う	48.8
2 すこしそう思う	37.8
3 どちらとも言えない	10.3
4 あまり思わない	2.0
5 そう思わない	0.7
無回答／無効回答	0.4
全数	100.0

表3-7. 将来の防災に役立つかどうかを見極めて、役に立つ情報や知識を優先して伝えるべきだ

	%
1 そう思う	44.0
2 すこしそう思う	37.5
3 どちらとも言えない	15.3
4 あまり思わない	2.2
5 そう思わない	0.7
無回答／無効回答	0.2
全数	100.0

表3-8. 大震災で亡くなった人の家族や友人を悲しませないために、犠牲者個人の話題は触れない方がよい

	%
1 そう思う	11.9
2 すこしそう思う	24.7
3 どちらとも言えない	44.7
4 あまり思わない	14.2
5 そう思わない	4.0
無回答／無効回答	0.4
全数	100.0

表3-9. 大震災の被害から力強く立ち直った被災者や被災地のエピソードをもっと伝えるべきだ

	%
1 そう思う	25.4
2 すこしそう思う	48.1
3 どちらとも言えない	20.9
4 あまり思わない	4.9
5 そう思わない	0.4
無回答／無効回答	0.2
全数	100.0



表3-10. 大震災についての記憶の継承については、被災者の感情や思いの継承にこそ力を入れるべきだ(D項目47) 大震災についての記憶の継承については、データに基づく客観的な情報の継承にこそ力を入れるべきだ(D項目48)

	%		%
1 そう思う	21.8		21.8
2 すこし思う	37.3		43.1
3 どちらとも言えない	29.9		28.3
4 あまり思わない	7.4		5.6
5 そう思わない	2.9		0.7
無回答/無効回答	0.7		0.4
全数	100.0		100.0

づく客観的な情報を重視する傾向が、被災者の感情や思いなどの主観的な情報より優位な点である。

以上のいくつかの結果に共通して示された、震災記憶の継承についてのある種の偏りをさして「震災記憶の選択的継承」とここでは概念化しておきたい。この「震災記憶の選択的継承」については、本論文の次の章と最後の考察の部分で、あらためて取り上げることになる。

ところで、ここで被災建築物の保存についての回答者たちの反応に触れておきたい。回答者たちは、「被災建築物」や「震災遺物」の保存に前向きな反応を示した。表3-11は、「大きな災害の被害を物語る象徴的な被災建築物や遺物は、たとえ辛い記憶を思い起こさせても残すべきだ」(D項目57)という刺激文に対する回答者たちの反応を示したものである。これによれば、震災遺構などの保存に賛成する者は、「そう思う」(22.2%)と「すこし思う」(38.2%)を合わせると、全体の約6割に及んでいる。先に表3-4で「災害からの復興を進めるためには、できるかぎり災害の爪痕は消して、新しい町並みや都市景観に作り変えるのがよい」(D項目51)という刺激文に対する回答者の反応を示した際、回答者の態度には賛否の確定に戸惑う態度が観られたと記した。しかし、「被災建築」や「震災遺物」といったキーワードを刺激文に加えると、回答者の反応は、抵抗なくそれらの保存に首肯する傾向があるようにみえた。

表3-11. 大きな災害の被害を物語る象徴的な被災建築物や遺物は、たとえ辛い記憶を思い起こさせても残すべきだ

	%
1 そう思う	22.2
2 すこし思う	38.2
3 どちらとも言えない	31.0
4 あまり思わない	5.4
5 そう思わない	2.2
無回答/無効回答	0.9
全数	100.0

### 5-3 大震災に関するその他の意識や態度

調査では、大震災の記憶を継承するため、マスメディア、行政、市民活動団体のそれぞれに果たしている努力について回答者の評価を尋ねる質問も行った。表3-12は、その結果を示している。この表によれば、「マスメディアは、阪神・淡路大震災の記憶や経験を伝える取り組みを十分に行っている」(D項目44)については、「そう思う」(22.9%)、「すこし思う」(44.5%)を合わせると、6割を超える回答者がマスメディアの記憶継承に対する努力を肯定的に評価している。このような傾向は、行政・地方公共団体(D項目45)や市民団体(D項目46)の記憶継承への努力に対しても同様で、それぞれに高い肯定的評価を示した。

この結果は、大震災についての直接的な経験を持たない震災後世代の若者たちであっても、自分たちにこれまでに提供されてきた大震災をめぐるさまざまな知識や情報の質や量について、その供

表3-12. ○○は、阪神・淡路大震災の記憶や経験を伝える取り組みを十分に行っている

	マスメディア	%	行政・地方公共団体	%	市民団体・ボランティア団体	%
1 そう思う		22.9		19.8		22.0
2 すこし思う		44.5		43.1		46.3
3 どちらとも言えない		24.3		27.0		24.0
4 あまり思わない		6.5		9.0		7.0
5 そう思わない		1.1		0.7		0.4
無回答／無効回答		0.7		0.4		0.2
全数		100.0		100.0		100.0

給に関わったメディア、行政、市民団体などの既存の社会システムが有効に機能しているという信頼感を持っていることを示唆しているといえるだろう。

しかし、他方、調査では、回答者に対してつぎのような刺激文に対する反応も求めた。「被災者の不正や被災地での犯罪など、支援や復興の妨げになる都合の悪い情報は隠されている」(D項目58)表3-13は、この刺激文に対する回答者の反応を示している。この表をみれば、都合の悪い情報は隠されているという意見に「そう思う」(20.2%)「すこし思う」(38.2%)と賛成の態度を示した回答者が、6割弱存在した。

回答者たちは、マスメディア、行政、市民団体などの既存の社会システムの情報提供に対して信頼を示しながら、その反面で「都合の悪い事実は隠されている」という疑心暗鬼の感情も同時に保持している。この2つのアンビバレンツな感情が、今後の災害記憶の継承、さらには、将来に起こりうる新たな災害に遭遇したときの彼／彼女ら自身の情報行動にどのように影響を及ぼすのか、注意深く観ていく必要があると思われる。

## 6. 語り継ぐべき大震災の記憶

震災後世代は大震災のどのような記憶を語り継ぐ必要があると考えているのだろうか。表4は、「語り継ぐ必要がある」から「語り継ぐ必要がない」までをプラス2からマイナス2までの5段階尺度によって回答者たちの反応を測定し、個々の項目ご

表3-13. 被災者の不正や被災地での犯罪など、支援や復興の妨げになる都合の悪い情報は隠されている

	%
1 そう思う	20.2
2 すこし思う	38.2
3 どちらとも言えない	35.3
4 あまり思わない	4.3
5 そう思わない	1.3
無回答／無効回答	0.7
全数	100.0

とに回答者全員の反応値の平均を評価点として示したものである。

これをみると、「将来の防災に役立つ教訓や知識など」(C項目38)や「震災直後の避難誘導、応急医療、水や食糧の配布などの支援活動」(C項目36)など、防災や減災について実用性の高い知識や情報に関する項目の記憶について語り継ぐ必要性は高く、反対に、「亡くなった人の個人の記録やエピソード」(C項目39)や「被災者個人の大震災に対する見解や震災後の生き方」(C項目40)など人間的なエピソードなどについては相対的に語り継ぐ必要性は低いという回答者の態度が認められた。この事実は、継承すべき震災の記憶の中でも、その種類や内容によって、継承の重要度に差があるということを示している。それは、前章ですこし触れたように、震災後世代による記憶継承について、いわば「選択的継承」という傾向がここでも現れていることを示している。

表4. 阪神・淡路大震災のどんな記憶を語り継ぐ必要があるか

	評価点*	標準偏差
38 将来の防災に役に立つような教訓や知恵など	1.72	0.56
36 震災直後の避難誘導、応急医療、水や食糧の配布などの支援活動	1.66	0.66
35 震災直後の人命救助、消火など救命救急活動	1.59	0.70
37 避難所や仮設住宅での被災者の生活の実情や苦勞など	1.51	0.73
42 意思疎通の障害や異文化の背景をもつ「災害弱者」の経験や困難など	1.42	0.80
34 個人の住宅や建物の被害状況、再建の過程など	1.40	0.77
33 道路、港湾施設、水道・電気・ガスなどのインフラ施設の被災状況、復旧過程など	1.39	0.79
41 被災地で活動したボランティアや市民団体の活動や経験	1.38	0.81
40 被災者個人の震災に対する見解や震災後の生き方など	1.26	0.83
39 亡くなった人の個人の記録やエピソードなど	1.02	0.96

\*5段階尺度の平均値 (-2 ← +2)

## 7. 記憶継承の効果的手段

震災後世代は大震災の記憶を伝えるにはどんな手段が効果的だと考えているのか。調査では、11項目の手段をもうけて、複数回答で回答者の反応を求めた。回答は、表5のとおりである。

この表によれば、回答者が記憶の継承について効果的だとみなす手段として、「学校教育」が1位で76.4%、2位が「被災者自身による語りかけ」で68.8%、これに「ノンフィクション作品」(57.1%)と「家族の会話」(52.1%)が続いている。50%を超える項目は、この4つであった。このように記憶継承の手段として「学校教育」に対する評価の高さは、たいへん大きいものであった。これと比べて、今の若い世代がよく使っていると思われる「SNSなど」が30.1%と低かったことが印象的であった。

このような傾向をどう理解すればよいか、考える必要がある。震災後世代である若者世代の多くが、彼／彼女らにとってどちらかといえば堅苦しくて窮屈な「学校」という教育機関を効果的な手段だと観ているのに対して、彼／彼女らがもっとも情報交換の手段として活用しているSNSを効果的だとする意見が3分の1に満たなかった。これを解釈するにはさらに踏み込んだ分析が必要だが、その1つとして、震災を知らない若い世代にとって、震災の記憶を語るという行為は、日常生活とは別

表5. あなたは阪神・淡路大震災の経験や記憶を伝えるためには、どのような手段が効果的だと思いますか？（複数回答）

	%
61 被災者の語りかけ	68.8
62 家族の会話	52.1
63 友人との会話	18.7
64 学校教育	76.4
65 ノンフィクション作品	57.1
66 フィクション作品	32.6
67 SNSなど	30.1
68 博物館や展示見学	41.1
69 記念碑等訪問	37.1
70 追悼行事等の参加	34.6
71 その他	4.7

の厳粛な特別の場で行うべきだという意識が反映されているのかも知れない。

## 8. 考察～震災記憶の継承における学校の影響力と「選択的継承」現象～

最後に、調査結果から読み取れたつぎの2つのことについて考察してみたい。1つは、震災記憶の継承における学校の影響力であり、もう1つは「震災記憶の選択的継承」という現象についてである。

### 8-1 震災記憶の継承における学校教育の影響力

調査結果では、7割近くの震災を知らない世代の若者が、学校をつうじてあの震災を知り、ま

た、学校教育がその記憶の継承に効果的だと答えた。実際、災害学習についてだけみても、学校教育の果たす役割は多様である。たとえば、教科書を使った平生の教室授業はもとより、特別にプログラムされた防災教育、語り部を招いた講演会、震災の記録ビデオの鑑賞、避難訓練など、さまざまな教材や手法による災害学習が行われており、学校の果たす役割は非常に大きい。

しかし、震災の記憶を伝える役割をすべて学校に任せてしまってもよいのかという問いかけは残されている。たしかに学校の果たす役割は大きい、とはいえ、大震災に限らず、歴史的な出来事について記憶や知識を継承する役割を学校にのみ強く求める傾向は、日本社会の特徴のように思われる。一例を挙げれば、表6は、2014年にフランスのショアー基金らが行った第2次世界大戦等についての記憶継承に関する国際比較調査<sup>7</sup>の結果を示したものである。この表をみれば、日本の若者にとって、第二次大戦の知識を知る最大の情報源が学校教育であると同時に、彼／彼女らが学校教育を記憶継承の手段としてもっとも効果的だと考えていることが分かるだろう。歴史の出来事について知識を得るには、さまざまな手段があるにもかかわらず、日本の子どもたちが知識を得た情報源は、学校教育が突出しており、他の手段は、すべて世界の平均よりも低くなっている。

これに対して、たとえば日本と同様に第二次大戦の敗戦国ドイツでは、学校が知識を得る情報源として高い比率を占めているものの、他にも、家族、あるいは、博物館や史跡訪問などが情報源として平均を上回る値を示している。また、日本による侵略で大きな被害を被った中国では、学校か

ら知識を得たと答えた若者の比率は、全体の平均を下回り、それ以外の情報源、たとえばドキュメンタリーなどのノンフィクション作品や小説やドラマなどのフィクション作品、インターネットなど、多様な情報源から第2次世界大戦についての知識や情報を得ていることがわかる。これを見ると、日本の社会が、歴史の記憶継承について学校教育にのみ強く依存していることが分かるだろう。

今回の調査では、回答者たちは、大震災についての情報源としては、学校(76.2%)に続いて、家族(67.0%)を第2位に挙げた。(表1参照)また、大震災の記憶を継承する手段としては、学校教育(76.4%)に続いて、「被災者の語りかけ」(68.8%)を第2位に挙げた。(表5参照)この結果を先ほどの第2次世界大戦の知識についての調査と比較すると、今回の回答者たちが、家族や被災者による語りの役割をより積極的に意識していることが分かる。

しかし、この結果を考える時、今回の回答者の約4分の1が被災地出身で、かつ約半数が身近に大震災の被災者がいるという回答者の特徴が、強く影響していると考えられるべきだろう。今後、時間の経過によってもなると、これらの条件が失われていくとき、第2次大戦の記憶について示されたように、大震災の記憶継承が学校教育だけによって担われる状況が生じることは十分に予想される。このような状況では、もし学校のカリキュラムや教科書が変わったり、大震災の学習に当てられる時間が減ってしまったりすると、震災の記憶継承が困難になってしまいかねない。

また、大震災の記憶の継承について、学校教育では果たせない領域もある。たとえば、家族や友人などとのインフォーマルなコミュニケーション

7 調査は2014年に、フランスのショアー基金と政治イノベーション基金の共同で、31カ国の3万人に及ぶ若者(16～29歳)を対象に、アンケート調査として実施された。主な調査対象国には、日本、ドイツ、アメリカ、中国、フランス、ロシア、オーストリア、イスラエルなどが含まれている。Fondation pour la Mémoire de la Shoah, Fondation pour l'innovation politique, Future Memories: A Survey on Memories of the 20th Century among 31,172 young people aged between 16 and 29, carried out in 24 languages across 31 countries, 2015. この調査についての日本語による概説については、武井彩佳『＜和解＞のポリティクス：ドイツ人とユダヤ人』みすず書房、2017年(pp246～250)を参照することができる。

表6. 国際比較調査\*(2014年)「あなたは第二次世界大戦に関する知識を何から得ましたか？」

	全体	日本	ドイツ	中国
家族(祖母、両親)	27%	12%	30%	6%
友人との議論	11%	5%	10%	12%
学校	83%	87%	91%	62%
ノンフィクション作品	46%	26%	39%	50%
フィクション作品	26%	17%	17%	48%
インターネット	29%	19%	24%	44%
博物館・展示	16%	4%	18%	15%
史跡訪問	14%	8%	20%	10%
記念や式典	8%	2%	1%	13%

\* Fondation pour la Mémoire de la Shoah, Fondation pour l'innovation politique, Future Memories: A Survey on Memories of the 20th Century among 31,172 young people aged between 16 and 29, carried out in 24 languages across 31 countries, 2015.

によってのみ伝えることができる領域も存在する。また、博物館や記念碑のような、特別に設けられた空間に身を置くことによって初めて受容できる知覚体験もあるはずである。大震災の記憶継承を学校教育にのみ依存するなら、学校という「教育の場」としての性質が、記憶の継承という多面的で多様性を含んだ人間的行為を一定の枠にはめてしまいかねない。それを考えると、学校以外の、記憶を継承するための多様な手段、多様なチャンネルが必要だと思われる。

## 8-2 震災記憶の「選択的継承」

つぎに、「震災記憶の選択的継承」という現象について、考えてみたい。今回の調査結果からわかった「震災記憶の選択的継承」についての傾向をまとめると、つぎのようになるだろう。

- ・ 将来の防災や災害時の対処法などに役立つ実用的な情報に関心が高い
- ・ 大震災の客観的事実やデータなど客観的情報への関心がより強く、被災者の感情や思い、犠牲者の辛い記憶など主観的な情報への関心が相対的に低い

震災を知らない若い世代が震災の記憶を継承する際、このような「かたより」があることが、今回の調査で浮き彫りにされた。

ただ、「記憶の選択的継承」という事実を短絡的

に「問題」だと決めつけることは避けるべきだろう。歴史的事実を記録したり、デジタルデータを記憶させたりするのは異なり、感情を持ち、忘れることも時に応じて正常な心理的反応である心身をもつ人間の営みとして、記憶を継承していく以上、そこに偏りや歪みが生じることはむしろ当然というべきだからである。したがって、大震災を直接経験していない若い世代が、このような傾向を示すことに対して短絡的に倫理的評価を下すことは避けられるべきことである。

そのような態度ではなく、ここで考えるべきことは、記憶を継承するための多様な手段、多様なチャンネルを準備することの必要性であると思われる。大震災の記憶を伝える多様な形態のメディアによる記録、被災者自身や被災地救援にかかわった多様な人々の肉声などに自由にアクセスできる機会が社会の中に用意されていることが必要である。そして、震災後世代が、それらにそれぞれの関心に応じて障害なくアクセスできるよう、彼／彼女らの自主性を尊重しながら、その営みを支援するために対話を交わしていくことが必要である。大震災を経験した世代と経験していない世代の間に、そのような相互に対等で開かれたコミュニケーションの場を社会が用意していくことが、これからの課題であるといえるだろう。

## 9. さいごに

調査の実施にあたって、調査に協力くださった特定非営利活動法人エフエムわいわい、神戸常盤大学、神戸大学、関西学院大学の関係者に感謝の意を表したい。また、時間のかかる調査票に真摯に回答してくださった神戸常盤大学、神戸大学、関西学院大学総合政策学部の学生たちにあらためて感謝を申し上げる。

なお、本論では、おもに調査結果の単純集計結果の概要を伝えることを主眼とした。調査から得られたデータのより深い分析については、機会を改めて公開したい。

震災25年を機会に、大震災の記憶をこれからどのように伝えていけばよいかについて、被災地だけでなく、ひろく社会的な議論が繰り広げられることを期待して、本論を閉じることにしたい。

## 別表 質問項目の全体と単純集計結果

### A あなたは阪神・淡路大震災についての知識や情報を何から得ましたか？

#### 1 大震災を経験した被災者から直接、話を聞いた

	実数	%
非選択	249	56.0
選択	196	44.0
全数	445	100.0

#### 2 家族・親類(祖父母、両親、兄弟姉妹、親類の人々)から聞いた

	実数	%
非選択	147	33.0
選択	298	67.0
全数	445	100.0

#### 3 友人との会話や議論をとおして知った

	実数	%
非選択	377	84.7
選択	68	15.3
全数	445	100.0

#### 4 学校の授業やホームルームで聞いた

	実数	%
非選択	106	23.8
選択	339	76.2
全数	445	100.0

#### 5 学校で使った教科書から知った

	実数	%
非選択	162	36.4
選択	283	63.6
全数	445	100.0

#### 6 学校で行われた追悼行事や式典をとおして知った

	実数	%
非選択	309	69.4
選択	136	30.6
全数	445	100.0

#### 7 ノンフィクション映像作品(テレビドキュメンタリー、記録映画、ネット動画など)を観て知った

	実数	%
非選択	204	45.8
選択	241	54.2
全数	445	100.0

## 8 ノンフィクション出版物(新聞・雑誌記事、本や写真集など)を読んで知った

	実数	%
非選択	350	78.7
選択	95	21.3
全数	445	100.0

## 9 フィクション映像作品(テレビドラマ、劇映画、ネット動画ドラマなど)を観て知った

	実数	%
非選択	346	77.8
選択	99	22.2
全数	445	100.0

## 10 フィクション出版物(文学作品、絵本、コミック本／雑誌など)を読んで知った

	実数	%
非選択	413	92.8
選択	32	7.2
全数	445	100.0

## 11 SNS、ブログ、ウェブページなどをとおして知った

	実数	%
非選択	316	71.0
選択	129	29.0
全数	445	100.0

## 12 「人と防災未来センター」(神戸市中央区脇浜海岸通り)を訪ねて知った

	実数	%
非選択	334	75.1
選択	111	24.9
全数	445	100.0

## 13 それ以外の博物館や展示物を観て知った

	実数	%
非選択	420	94.4
選択	25	5.6
全数	445	100.0

## 14 「慰霊と復興のモニュメント」(神戸市中央区市役所南東遊園地内)を観て知った

	実数	%
非選択	412	92.6
選択	33	7.4
全数	445	100.0

## 15 神戸港メモリアルパーク(メリケン波止場)を観て知った

	実数	%
非選択	371	83.4
選択	74	16.6
全数	445	100.0

## 16 北淡震災記念公園を訪ねて知った

	実数	%
非選択	419	94.2
選択	26	5.8
全数	445	100.0

## 17 その他の記念碑やモニュメントを観て知った

	実数	%
非選択	433	97.3
選択	12	2.7
全数	445	100.0

## 18 行政や公共団体が主催する行事で知った

	実数	%
非選択	415	93.3
選択	30	6.7
全数	445	100.0

## 19 地域の商店街や自治会などが主催する行事で知った

	実数	%
非選択	425	95.5
選択	20	4.5
全数	445	100.0

## 20 お寺や教会、神社などの宗教施設が主催する行事で知った

	実数	%
非選択	438	98.4
選択	7	1.6
全数	445	100.0

## 21 その他の行事やイベント

	実数	%
非選択	412	92.6
選択	33	7.4
全数	445	100.0

## B 阪神・淡路大震災について、あなたの関心の程度

### 22 全体として阪神・淡路大震災について

	実数	%
1 関心がある	121	27.2
2 すこし関心がある	189	42.5
3 どちらとも言えない	74	16.6
4 あまり関心がない	15	3.4
5 関心がない	1	0.2
無回答／無効回答	45	10.1
全数	445	100.0

### 23 道路、港湾施設、水道・電気・ガスなどのインフラ施設の被災状況、復旧の過程などについて

	実数	%
1 関心がある	92	20.7
2 すこし関心がある	181	40.7
3 どちらとも言えない	89	20.0
4 あまり関心がない	33	7.4
5 関心がない	6	1.3
無回答／無効回答	44	9.9
全数	445	100.0

### 24 個人の住宅や建物の被害状況、再建の過程などについて

	実数	%
1 関心がある	95	21.3
2 すこし関心がある	195	43.8
3 どちらとも言えない	82	18.4
4 あまり関心がない	24	5.4
5 関心がない	5	1.1
無回答／無効回答	44	9.9
全数	445	100.0

### 25 震災直後の人命救助、消火など救命救急活動について

	実数	%
1 関心がある	142	31.9
2 すこし関心がある	187	42.0
3 どちらとも言えない	58	13.0
4 あまり関心がない	14	3.1
5 関心がない	1	0.2
無回答／無効回答	43	9.7
全数	445	100.0

### 26 震災直後の避難誘導、応急医療、水や食糧の配布などの支援活動について

	実数	%
1 関心がある	177	39.8
2 すこし関心がある	167	37.5
3 どちらとも言えない	45	10.1
4 あまり関心がない	12	2.7
5 関心がない	1	0.2
無回答／無効回答	43	9.7
全数	445	100.0

### 27 避難所や仮設住宅での被災者の生活の苦労や工夫などについて

	実数	%
1 関心がある	155	34.8
2 すこし関心がある	210	47.2
3 どちらとも言えない	63	14.2
4 あまり関心がない	15	3.4
5 関心がない	2	0.4
無回答／無効回答	0	0.0
全数	445	100.0

### 28 将来の防災に役に立つような教訓や知恵などについて

	実数	%
1 関心がある	229	51.5
2 すこし関心がある	155	34.8
3 どちらとも言えない	51	11.5
4 あまり関心がない	8	1.8
5 関心がない	0	0.0
無回答／無効回答	2	0.4
全数	445	100.0

### 29 亡くなった人の個人の記録やエピソードなどについて

	実数	%
1 関心がある	107	24.0
2 すこし関心がある	161	36.2
3 どちらとも言えない	137	30.8
4 あまり関心がない	33	7.4
5 関心がない	6	1.3
無回答／無効回答	1	0.2
全数	445	100.0



## 30 被災者個人の大地震に対する見解や震災後の生き方などについて

	実数	%
1 関心がある	115	25.8
2 すこし関心がある	186	41.8
3 どちらとも言えない	101	22.7
4 あまり関心がない	35	7.9
5 関心がない	6	1.3
無回答／無効回答	2	0.4
全数	445	100.0

## 31 被災地で活動したボランティアや市民団体の活動や経験について

	実数	%
1 関心がある	123	27.6
2 すこし関心がある	176	39.6
3 どちらとも言えない	101	22.7
4 あまり関心がない	34	7.6
5 関心がない	8	1.8
無回答／無効回答	3	0.7
全数	445	100.0

## 32 意思疎通の障害や異文化の背景をもつ「災害弱者」の経験や困難などについて

	実数	%
1 関心がある	123	27.6
2 すこし関心がある	175	39.3
3 どちらとも言えない	110	24.7
4 あまり関心がない	32	7.2
5 関心がない	5	1.1
無回答／無効回答	0	0.0
全数	445	100.0

## C あなたは阪神・淡路大震災のどんな記憶を語り継ぐ必要があると思いますか。

## 33 道路、港湾施設、水道・電気・ガスなどのインフラ施設の被災状況、復旧過程などについて語り継ぐ

	実数	%
1 必要がある	222	49.9
2 どちらかという必要がある	124	27.9
3 どちらとも言えない	47	10.6
4 あまり必要ない	8	1.8
5 必要ない	1	0.2
無回答／無効回答	43	9.7
全数	445	100.0

## 34 個人の住宅や建物の被害状況、再建の過程などについて語り継ぐ

	実数	%
1 必要がある	220	49.4
2 どちらかという必要がある	132	29.7
3 どちらとも言えない	41	9.2
4 あまり必要ない	8	1.8
5 必要ない	1	0.2
無回答／無効回答	43	9.7
全数	445	100.0

## 35 震災直後の人命救助、消火など救命救急活動について語り継ぐ

	実数	%
1 必要がある	275	61.8
2 どちらかという必要がある	90	20.2
3 どちらとも言えない	30	6.7
4 あまり必要ない	4	0.9
5 必要ない	1	0.2
無回答／無効回答	45	10.1
全数	445	100.0

## 36 震災直後の避難誘導、応急医療、水や食糧の配布などの支援活動について語り継ぐ

	実数	%
1 必要がある	300	67.4
2 どちらかという必要がある	72	16.2
3 どちらとも言えない	26	5.8
4 あまり必要ない	1	0.2
5 必要ない	2	0.4
無回答／無効回答	44	9.9
全数	445	100.0

## 37 避難所や仮設住宅での被災者の生活の実情や苦勞などについて語り継ぐ

	実数	%
1 必要がある	275	61.8
2 どちらかという必要がある	127	28.5
3 どちらとも言えない	29	6.5
4 あまり必要ない	9	2.0
5 必要ない	1	0.2
無回答／無効回答	4	0.9
全数	445	100.0

## 41 被災地で活動したボランティアや市民団体の活動や経験について語り継ぐ

	実数	%
1 必要がある	243	54.6
2 どちらかという必要がある	141	31.7
3 どちらとも言えない	52	11.7
4 あまり必要ない	4	0.9
5 必要ない	5	1.1
無回答／無効回答	0	0.0
全数	445	100.0

## 38 将来の防災に役に立つような教訓や知恵などについて語り継ぐ

	実数	%
1 必要がある	342	76.9
2 どちらかという必要がある	83	18.7
3 どちらとも言えない	19	4.3
4 あまり必要ない	0	0.0
5 必要ない	1	0.2
無回答／無効回答	0	0.0
全数	445	100.0

## 42 意思疎通の障害や異文化の背景をもつ「災害弱者」の経験や困難などについて語り継ぐ

	実数	%
1 必要がある	257	57.8
2 どちらかという必要がある	130	29.2
3 どちらとも言えない	48	10.8
4 あまり必要ない	5	1.1
5 必要ない	4	0.9
無回答／無効回答	1	0.2
全数	445	100.0

## 39 亡くなった人の個人の記録やエピソードなどについて語り継ぐ

	実数	%
1 必要がある	167	37.5
2 どちらかという必要がある	150	33.7
3 どちらとも言えない	96	21.6
4 あまり必要ない	23	5.2
5 必要ない	6	1.3
無回答／無効回答	3	0.7
全数	445	100.0

## 40 被災者個人の大震災に対する見解や震災後の生き方などについて語り継ぐ

	実数	%
1 必要がある	208	46.7
2 どちらかという必要がある	150	33.7
3 どちらとも言えない	76	17.1
4 あまり必要ない	5	1.1
5 必要ない	3	0.7
無回答／無効回答	3	0.7
全数	445	100.0

D 次のような意見があります。あなたの共感の程度を教えてください。

43 阪神・淡路大震災の被災地は、おおむね復興をとげている。

	実数	%
1 そう思う	269	60.4
2 すこし思う	137	30.8
3 どちらとも言えない	30	6.7
4 あまり思わない	6	1.3
5 そう思わない	1	0.2
無回答／無効回答	2	0.4
全数	445	100.0

44 マスメディアは、阪神・淡路大震災の記憶や経験を伝える取り組みを十分に行っている

	実数	%
1 そう思う	102	22.9
2 すこし思う	198	44.5
3 どちらとも言えない	108	24.3
4 あまり思わない	29	6.5
5 そう思わない	5	1.1
無回答／無効回答	3	0.7
全数	445	100.0

45 行政や地方公共団体は、阪神・淡路大震災の記憶や経験を伝える取り組みを十分に行っている

	実数	%
1 そう思う	88	19.8
2 すこし思う	192	43.1
3 どちらとも言えない	120	27.0
4 あまり思わない	40	9.0
5 そう思わない	3	0.7
無回答／無効回答	2	0.4
全数	445	100.0

46 市民やボランティア団体は、阪神・淡路大震災の記憶や経験を伝える取り組みを十分に行っている

	実数	%
1 そう思う	98	22.0
2 すこし思う	206	46.3
3 どちらとも言えない	107	24.0
4 あまり思わない	31	7.0
5 そう思わない	2	0.4
無回答／無効回答	1	0.2
全数	445	100.0

47 大震災について記憶の継承については、被災者の感情や思いの継承にこそ力を入れるべきだ

	実数	%
1 そう思う	97	21.8
2 すこし思う	166	37.3
3 どちらとも言えない	133	29.9
4 あまり思わない	33	7.4
5 そう思わない	13	2.9
無回答／無効回答	3	0.7
全数	445	100.0

48 大震災についての記憶の継承については、データに基づく客観的な情報の継承にこそ力を入れるべきだ

	実数	%
1 そう思う	97	21.8
2 すこし思う	192	43.1
3 どちらとも言えない	126	28.3
4 あまり思わない	25	5.6
5 そう思わない	3	0.7
無回答／無効回答	2	0.4
全数	445	100.0

49 大震災の被災者の個人的な経験や記憶は、将来の防災に役立たなくても記録して残すべきだ

	実数	%
1 そう思う	143	32.1
2 すこし思う	188	42.2
3 どちらとも言えない	82	18.4
4 あまり思わない	22	4.9
5 そう思わない	10	2.2
無回答／無効回答	0	0.0
全数	445	100.0

50 大震災で亡くなった人の家族や友人を悲しませないために、犠牲者個人の話題は触れない方がよい

	実数	%
1 そう思う	53	11.9
2 すこし思う	110	24.7
3 どちらとも言えない	199	44.7
4 あまり思わない	63	14.2
5 そう思わない	18	4.0
無回答／無効回答	2	0.4
全数	445	100.0

51 災害からの復興を進めるためには、できるかぎり災害の爪痕は消して、新しい町並みや都市景観に作り変えるのがよい

	実数	%
1 そう思う	50	11.2
2 すこし思う	92	20.7
3 どちらとも言えない	178	40.0
4 あまり思わない	91	20.4
5 そう思わない	32	7.2
無回答／無効回答	2	0.4
全数	445	100.0

52 大震災の被害から力強く立ち直った被災者や被災地のエピソードをもっと伝えるべきだ

	実数	%
1 そう思う	113	25.4
2 すこし思う	214	48.1
3 どちらとも言えない	93	20.9
4 あまり思わない	22	4.9
5 そう思わない	2	0.4
無回答／無効回答	1	0.2
全数	445	100.0

53 大震災の復興が進んでいない町や地域について知らせることは、イメージが暗くなるので強調しない方がよい

	実数	%
1 そう思う	26	5.8
2 すこし思う	53	11.9
3 どちらとも言えない	123	27.6
4 あまり思わない	142	31.9
5 そう思わない	98	22.0
無回答／無効回答	3	0.7
全数	445	100.0

54 大震災で傷ついたり、亡くなったりした人の悲しい話はできれば聞きたくない

	実数	%
1 そう思う	36	8.1
2 すこし思う	103	23.1
3 どちらとも言えない	151	33.9
4 あまり思わない	97	21.8
5 そう思わない	56	12.6
無回答／無効回答	2	0.4
全数	445	100.0

55 復興過程で生じた社会問題などを広く伝えることは必要だ

	実数	%
1 そう思う	228	51.2
2 すこし思う	171	38.4
3 どちらとも言えない	35	7.9
4 あまり思わない	3	0.7
5 そう思わない	2	0.4
無回答／無効回答	6	1.3
全数	445	100.0

56 将来の防災に役立つかどうかを見極めて、役に立つ情報や知識を優先して伝えるべきだ

	実数	%
1 そう思う	196	44.0
2 すこし思う	167	37.5
3 どちらとも言えない	68	15.3
4 あまり思わない	10	2.2
5 そう思わない	3	0.7
無回答／無効回答	1	0.2
全数	445	100.0

57 大きな災害の被害を物語る象徴的な被災建築物や遺物は、たとえ辛い記憶を思い起こさせても残すべきだ

	実数	%
1 そう思う	99	22.2
2 すこし思う	170	38.2
3 どちらとも言えない	138	31.0
4 あまり思わない	24	5.4
5 そう思わない	10	2.2
無回答／無効回答	4	0.9
全数	445	100.0

58 被災者の不正や被災地での犯罪など、支援や復興の妨げになる都合の悪い情報は隠されている

	実数	%
1 そう思う	90	20.2
2 すこし思う	170	38.2
3 どちらとも言えない	157	35.3
4 あまり思わない	19	4.3
5 そう思わない	6	1.3
無回答／無効回答	3	0.7
全数	445	100.0

## 59 震災を知らない世代でも、大震災の記憶や経験を将来に伝える責任がある

	実数	%
1 そう思う	217	48.8
2 すこしそう思う	168	37.8
3 どちらとも言えない	46	10.3
4 あまり思わない	9	2.0
5 そう思わない	3	0.7
無回答／無効回答	2	0.4
全数	445	100.0

## 60 あなたの学んでいる大学は、阪神・淡路大震災の被害や歴史について伝える努力をしている

	実数	%
1 そう思う	72	16.2
2 すこしそう思う	128	28.8
3 どちらとも言えない	113	25.4
4 あまり思わない	94	21.1
5 そう思わない	36	8.1
無回答／無効回答	2	0.4
全数	445	100.0

## E あなたは阪神・淡路大震災の経験や記憶を伝えるためには、どのような手段が効果的だと思いますか。

## 61 被災者自身による直接的な語りかけ

	実数	%
非選択	139	31.2
選択	306	68.8
全数	445	100.0

## 62 家族・親類(祖父母、両親、兄弟姉妹、親類の人々)の語りや会話

	実数	%
非選択	213	47.9
選択	232	52.1
全数	445	100.0

## 63 友人との会話や議論

	実数	%
非選択	362	81.3
選択	83	18.7
全数	445	100.0

## 64 学校教育

	実数	%
非選択	105	23.6
選択	340	76.4
全数	445	100.0

## 65 ドキュメンタリーや記録映画、写真集、ネット動画などのノンフィクション作品

	実数	%
非選択	191	42.9
選択	254	57.1
全数	445	100.0

## 66 ドラマや劇映画、小説、コミック、ネット動画などのフィクション作品

	実数	%
非選択	300	67.4
選択	145	32.6
全数	445	100.0

## 67 SNSやブログ、ウェブページ

	実数	%
非選択	311	69.9
選択	134	30.1
全数	445	100.0

## 68 博物館や展示見学

	実数	%
非選択	262	58.9
選択	183	41.1
全数	445	100.0

## 69 記念碑やモニュメント、史跡訪問

	実数	%
非選択	280	62.9
選択	165	37.1
全数	445	100.0

## 70 追悼行事や記念イベントへの参加

	実数	%
非選択	291	65.4
選択	154	34.6
全数	445	100.0

## 71 その他

	実数	%
非選択	424	95.3
選択	21	4.7
全数	445	100.0

## フェースシート

## 72 年齢

	実数	%
1 18歳以下	23	5.2
2 19歳	232	52.1
3 20歳	134	30.1
4 21歳	36	8.1
5 22歳以上	14	3.1
無回答／無効回答	6	1.3
全数	445	100.0

## 73 性別

	実数	%
1 女性	269	60.4
2 男性	166	37.3
3 その他	5	1.1
無回答／無効回答	5	1.1
全数	445	100.0

## 74 出生地(生まれたところ)

	実数	%
1 神戸市	54	12.1
2 芦屋市	7	1.6
3 西宮市	15	3.4
4 宝塚市	14	3.1
5 伊丹市	8	1.8
6 尼崎市	8	1.8
7 明石市	6	1.3
8 (現在の)淡路市*	6	1.3
9 上記(1～8)以外の兵庫県内	118	26.5
0 上記(1～9)以外の地域	205	46.1
無回答／無効回答	4	0.9
全数	445	100.0

\* 旧：淡路町、北淡町、一宮町、東浦町、津名町

## 75 現在の居住地(今、住んでいるところ)

	実数	%
1 神戸市	119	26.7
2 芦屋市	12	2.7
3 西宮市	33	7.4
4 宝塚市	37	8.3
5 伊丹市	8	1.8
6 尼崎市	8	1.8
7 明石市	8	1.8
8 (現在の)淡路市*	3	0.7
9 上記(1～8)以外の兵庫県内	146	32.8
0 上記(1～9)以外の地域	69	15.5
無回答／無効回答	2	0.4
全数	445	100.0

\* 旧：淡路町、北淡町、一宮町、東浦町、津名町

## 76 あなたは阪神・淡路大震災の被災地に4年以上住んだことがありますか

	実数	%
1 住んだことがある	115	25.8
2 住んだことがない	327	73.5
無回答／無効回答	3	0.7
全数	445	100.0

## 77 あなたの周囲に阪神・淡路大震災で被災された方がおられますか

	実数	%
1 家族が被災した	154	34.6
2 親類が被災した	58	13.0
3 知人や友人が被災した	23	5.2
4 いない	197	44.3
無回答／無効回答	13	2.9
全数	445	100.0

## 78 あなたは2011年の東日本大震災の揺れを経験しましたか

	実数	%
1 はい	141	31.7
2 いいえ	298	67.0
無回答／無効回答	6	1.3
全数	445	100.0

## 79 あなたは2018年の大阪北部地震の揺れを経験しましたか

	実数	%
1 はい	346	77.8
2 いいえ	87	19.6
無回答／無効回答	12	2.7
全数	445	100.0